

国

語

(45分 100点) (解答番号

1

5

20

)

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(30点)

大樹と寺社といかがわしい場末に共通しているのは、それらがこの世界の〈外〉に通じる開口部や裂け目であるということだ。わたしたちの日常の共通感覚(1)をひきつらせるという意味で、妖(2)しい場所である。そして妖しいというのは、怖いけれども(あるいは、怖いがゆえに)どうしようもなく惹きつけられる場所ということでもある。惹きつけられるのは、シュルレアリストたちが合言葉にしていた *changer la vie* (生を変える)、つまりじぶんの存在の別の可能性へと揺さぶられるからだろう。存在の別の可能性への移行は現在のじぶんのホウ(3)壊を意味する。そのカタストロフィー(4)の感覚に没入しかけるからだろう。そんな「別の世界」への想像を(5)駆る都市の隙間(すきま)が、古木であり寺社であり場末だった。そして現代、消費の記号で埋めつくされてどこにも隙間のない都市、隙間さえも記号としてただちに消費されてしまうそんな都市において、古木と寺社と場末に代わるのが、ひよっとしたらアートなのではないかとおもう。それもまた一個の記号として消費される危うさをけつして免れていないし、また現にそうだとしても。

とはいえ、隙間(6)は空(6)キヨというだけで肯定されるべきものでもない。どこにも隙間のない世界は、たしかに隙間が狭すぎて、別様の存在の可能性が見えなくなる。その世界はあまりに確固として硬く(7)ということ(8)はあまりに脆いということでもあるのだが、ひとがなにか力を加えることで変わるとい(7)う感じがしない。ひととしては、無力感、つまりはふんづまりの閉塞感(8)に包まれる。が、隙間が大きすぎると、世界はゆるゆるのつかみどころのないものとなつて、ひとはたえず不安に襲われる。その反動で、隙間のない硬い世界以上に硬い世界を構築しようと焦ることになる。過剰なまでの合理主義や過度の饒舌(8)、嫉妬心、被害妄想、さらには、つねに厳格に同じ仕方で同じ行為をおこなわないと安心できない常同行為、あるいは幼児性への退行現象といっ

た、定まった規則の存在の確認に異様なまでにこだわることで、緩すぎるその隙間を埋めあわせようとやっきになる。そうしてはじめにもとめていた (9) とは正反対のカタレプシー（硬直状態）に陥ってしまう。この世界の〈外〉へ踏みだすのではなく、この世界の内部に閉塞しきってしまう。

（鷺田清一『京都の平熱 哲学者の都市案内』による）

問1 空欄番号

(1) ・ (9) に入る語として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選んでマークしなさい。

1

2

- (1)
- ① コーディネート
② コーポレーション
③ コスモポリタン
④ コミュニティー
⑤ コモンセンス

- (9)
- ① 無限性
② 可塑性
③ 転移性
④ 耐久性
⑤ 有益性

問2

傍線番号(2)・(5)の、本文における意味として最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選んでマークしなさい。

3

4

- (2) 妖しい
- ① 変なところがあり疑わしい
② 確かでなく信用ができない
③ 不気味で安心できない
④ 不可思議で魅力的な
⑤ 風変わりで味わい深い

- (5) 駆る
- ① 変えてしまう
② 切り取る
③ あおる
④ 捕まえる
⑤ 遠ざける

問3 傍線番号(3)・(6)に該当する漢字を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選んでマークしなさい。

(3) 「ホウ」

① 封

② 邦

③ 報

④ 崩

⑤ 抱

5

6

(6) 「キョ」

① 距

② 拳

③ 虚

④ 拒

⑤ 拠

6

問4 傍線番号(4)「カタストロフィー」が意味するものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んでマークしなさい。

い。

7

① 脅威

② 再生

③ 浄化

④ 破局

⑤ 変遷

問5 傍線番号(7)「ゆるゆるのつかみどころのないもの」と同じような意味を表す四字熟語として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んでマークしなさい。

⑤の中から一つ選んでマークしなさい。

8

① 曖昧模糊

② 渾然一体

③ 深山幽谷

④ 臨機応変

⑤ 悠々自適

問 6 傍線番号(8)「饒舌」の対義語として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んでマークしなさい。

9

- ① 安寧
- ② 寡黙
- ③ 穏和
- ④ 冷静
- ⑤ 無視

第二問 次の文章は「蛙」について記されたものであるが、この文章を読んで、後の問いに答えなさい。(70点)

『万葉集』をはじめとする和歌文学では、一般に「かはづ」が用いられ、「かへる」とは言わない。『万葉集』の場合、「かはづ」は二十首の歌に詠まれ、「河津・川津・川豆・河蝦」などと表記されている。これらは(10)に生息して、初夏から秋にかけての繁殖期に雄がヒヨロヒヨロヒヒヒと澄んだ声で鳴く蛙、すなわち河鹿を詠んでいる。古代人はこの溪流の住人の美声を、秋の山の鹿に對して「河の鹿」と呼んだのであろう。「春の日は 山し見がほし 秋の夜は 河し清けし 朝雲に 鶴は乱れ夕霧に 河津はさわく」(山部赤人)。ここでは「かはづ」は秋夜の(11)をいやがうえにも深め、その美声が鶴の美しい姿に匹敵するものとしてとらえられている。「草枕旅に物思ひわが聞けば夕片設けて鳴く河蝦かも」(上つ瀬に河蝦妻呼ぶ夕されば衣手寒み妻枕かむとか)のような歌には、「かはづ」の美声が郷愁をいやがうえにも誘い、また恋のあわれを誘うものとして、古代人にとりわけ印象的だった事情がうかがわれる。

A

これら万葉歌の中でもとくに後世の美学との関連で重視すべき歌は、厚見王の次の一首である。「河津鳴く神名火川に影見え今か咲くらむ山吹の花」(注4)この「かはづ」と山吹の組み合わせは、平安朝以後の歌人たちに深く愛好された。「かはづ鳴く井出の山吹散りにけり花の盛りにあはましものを」(古今集)、「山吹の花さきにけりかはづなく井手の里人いまよとほまし」(藤原基俊『千載集』)、「山吹の花のさかりはかはづなく井出にや春も立ちとまるらむ」(中務『風雅集』)、『連珠合璧集』に蛙との取り合わせの素材として、「蛙とあらば、井手、山吹、相宿り、かひやが下、苗代水、水に住む、歌」とあるように、『万葉』の厚見王の歌一首がもたらした蛙と山吹の取り合わせの美意識は、さらに田の用水をせきとめてつくる井堰、すなわち井出との取り合わせも生んで、近世和歌にまで脈々と流れているわけである。そういう事情を反映したものだろうが、厚見王の歌は『新古今集』にも採られている。

B

『古今集』仮名序に「花に啼く鶯、水に棲む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」とある箇所は有名だが、この一節が後世の蛙観におよぼした影響ももちろん計り知れないものがある。

C

芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水をと」の重要性もまさにそこからくる。元来この句は晩春の芭蕉庵に弟子の榎本其角らが参集していたときにできた句とされている。このとき「蛙飛びこむ水をと」という七五を得た芭蕉が上五をつけあぐんでいると、其角が「山吹や」とすることを提案した。(14) 芭蕉はそれを避けて「古池や」をここに据え、結果としてこの句が蕉風を代表する一句となったのである。其角が山吹をあしらうように進言したのは、当時の美学の常識からすれば最も妥当だったことは、上述の背景からも納得できるところだろう。仮に芭蕉がこれを受け入れていたとしても、句はそれなりに晩春の景情をしつとりとらえた句として、難なく一同に受けとめられたに違いない。彼がそれをあえて「古池や」にしたとき、その場に居合わせた門人たちは、(15) とまどいを感じたのではないかとさえ思われる。「山吹や」の彩りと一種華やかな気分を捨てて、「古池や」をすんなり受け入れるには、彼らの呼吸していた伝統的情緒の世界は強固な歴史を持ちすぎていた。さらに、「古池」と「水音」とでは、(17) 、いわば即きすぎの難があるとも言えるだろう。句は当然、外へ向かつてのひろがりをもたず、逆に静寂だけを集中的にとらえる内向的なものにならざるを得ない。言い換えれば、句は外部の情景を詠むことに託して、作者自身の自己集中的、瞑想的気分を重点的に表現するものとならざるを得ないのである。ここに、芭蕉の俳諧文学革新に向けての、意表をつく着眼点があった。これをもうすこし押しひろげて言えば、句は美意識の約束事の上に成り立つ芸の世界から、個人の内面の消息を表現する新しい詩の世界、文学の世界へと進み入ることになったのである。

D

「古池や」の句の文学史的な意義をこの点にみるなら、芭蕉が蛙という題材を、その美しい鳴き声ではなく、水に飛び込むものの変哲もない小さな水音でとらえたことの重要性も、おのずと理解できるだろう。

E

しかし、芭蕉がこの句を、単に孤独閑寂な心境の表現としてのみ作ったのではないことも指摘しておかねばならない。

(20) 芭蕉のこの新機軸の句に興じた門人たちは、この句を筆頭に、和歌の歌合にならって「蛙合」二十番を作っているからである。孤独閑寂の句はそこでは新しい試みへの楽しい呼びかけとなった。俳諧はあくまで連衆あつての俳諧なのである。

(大岡信『みち草』による)

(注1) 古都飛鳥を慕ってつくられた長歌の一部。「春の日には山が美しく(それを見たい)、秋の夜は河の音がさやかである。

朝立つ雲に鶴は乱れ舞い、夕霧の中で河鹿はしきりに鳴き立てている」

(注2) 「旅に出て、物思いしながら耳を傾けていると、夕方になって河鹿が鳴いているよ」

(注3) 「上流の瀬で河鹿が妻を呼んで鳴いている。夕暮れになって袖のあたりが肌寒いので共寝しようというのだろうか」

(注4) 「河鹿が鳴いている神名火川に影を落として、今咲いているのだろうか、山吹の花が」

(注5) 「河鹿と山吹で名高い井出に来て見ると、河鹿は澄んだ声で鳴いているのに、もう山吹は散ってしまっているよ。そうとわかっていたら、もつと早く来て花の盛りを見たであろうに、残念なことだ」

(注6) 「山吹の花が咲いたことだなあ。山吹の名所、河鹿が鳴く井手の里人を今こそ訪ねたいものだ」

(注7) 「山吹の花の盛りには、河鹿の鳴く井出の川のほとりに、去ろうとする春も暫くは立ちどまることだろう」

(注8) 「梅の花に鳴く鶯や、川に棲む河鹿の鳴き声を聞けば、生き物は、すべて歌を詠むものだとなる」

(注9) 連衆——連歌・俳諧の会に作者として列席する人々。

問1 空欄番号

(10)

(11)

(17)

に入る語句として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ

れ一つずつ選んでマークしなさい。

10

12

10 (10)

- ① 川の清流
- ② 野の片隅
- ③ 春には原野
- ④ 春には河口
- ⑤ 森の奥深く

11 (11)

- ① 生き生きした雰囲気
- ② 楽しい様子
- ③ 清涼の気分
- ④ はかない印象
- ⑤ 哀惜の念

12 (17)

- ① 美しさがなくて
- ② 音の響きが単調すぎて
- ③ 素材があまりにも接近しており
- ④ 情景としてありふれており
- ⑤ 画一的な組み合わせになってしまい

問2 傍線番号⑫「後世の美学との関連で重視すべき歌」となった理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選ん

でマークしなさい。

13

- ① 井出、相宿りなどとの関連で、蛙と山吹の組み合わせの美意識を生むものになった歌だから
- ② 蛙と山吹という新しい組み合わせによって、さまざまな組み合わせの可能性を示した歌だから
- ③ 蛙をその鳴き声の美しさで詠み、山吹をその華やかさで詠む美意識のもとになった歌だから
- ④ 近世和歌にまで脈々と受け継がれる、蛙と山吹、井出などとの組み合わせを生むものになった歌だから
- ⑤ 蛙の鳴き声を生命の象徴としてとらえる美的観念を作り上げた歌だから

問3

傍線番号⑬「其角が『山吹や』とすることを提案した」ことに対して作者はどう考えているか。最も適切なものを、次の

- ①～⑤の中から一つ選んでマークしなさい。

14

① 蛙との伝統的な組み合わせである山吹を上五に据えることで、七五の表現の新しさが引き立てられ、すばらしい一句になる

② 蛙の「水音」と山吹を組み合わせることによって、作者の瞑想的気分と伝統的な美意識の両方を表現することができて、しつとりと晩春の景情を詠んだ一句になる

③ 蛙を飛びこむ水音でとらえた七五に対して、蛙と伝統的に組み合わせられる山吹をあしらうことによって、一応は晩春の景情をとらえた一句になる

④ 蛙を鳴く声でなく飛びこむ水音でとらえた七五に対して、蛙との伝統的な組み合わせである山吹を上五に据えることで、結びつきの食い違った滑稽味こっけいのある一句になる

⑤ 『万葉集』以来の蛙と山吹の組み合わせによる美意識を引き継ぐことによって、晩春の景情を表現してはいるが、陳腐さのただよう一句になる

問4 空欄番号(14)・(15)・(20)に入る接続詞の並びとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで

マークしなさい。

15

- ① しかし——すなわち——むしろ
- ② しかし——むしろ——すなわち
- ③ すなわち——しかし——むしろ
- ④ すなわち——むしろ——しかし
- ⑤ むしろ——しかし——すなわち

問5 傍線番号(16)「とまどいを感じたのではないか」と作者が思うのはどうしてか。その説明として最も適切なものを、次の①

～⑤の中から一つ選んでマークしなさい。

16

- ① 春の季語である「山吹」ではなく、季節感のない「古池」を据えたから
- ② 「古池」のイメージが暗いため、晩春の景情にふさわしくないから
- ③ 「古池」と「蛙」との組み合わせが非凡すぎて、理解を超えているから
- ④ 「古池」が今までにない語であり、七五の斬新さを台無しにしてしまうから
- ⑤ 「古池や」を上五につけると、伝統的情緒の世界とはかけ離れたものになるから

問6 傍線番号⁽¹⁸⁾「意表をつく着眼点」についての説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んでマークしなさい。

い。
17

- ① 外部との関係を絶つことで、静寂境だけを集中的にとらえる
- ② 外部の情景によって、作者自身の自己集的、瞑想的気分を高める
- ③ 外へ向かう意識と内へ向かう意識の調和をとることによって、新しい俳諧を作り上げる
- ④ 外へ向かつてのひろがりをもたないことで、逆に個人の内面を重点的に表現する
- ⑤ 内向的な句にすることで、句の彩りや華やかさが一層増すことになる

問7 傍線番号⁽¹⁹⁾「蛙という題材を、その美しい鳴き声ではなく、水に飛び込むなんの変哲もない小さな水音でとらえたことの

重要性」の内容として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んでマークしなさい。

18

- ① 当時の美学の常識にこだわらず、題材の新しい組み合わせを見つけ出したこと
- ② 伝統的な美意識から離れて、孤独閑寂な心境の象徴として、水の音を用いたこと
- ③ 伝統的な美よりも、情景をあるがままに表現する写実を重視したこと
- ④ なにげない日常的な情景を詠むことで、独自の美意識と芸の世界を作り上げたこと
- ⑤ ありふれた題材の新しい用い方によって、美意識の約束事を進歩させたこと

問8 傍線番号②「新しい試み」とはどういうことか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んでマークしなさい。

19

- ① これまでになかったような新機軸の句を、「蛙合」二十番の筆頭におくこと
- ② 俳諧文学の革新のために、「蛙合」二十番を作り上げること
- ③ 蛙を題材にして、芭蕉の句をまねた孤独閑寂の句を作り競い合うこと
- ④ 文学的な句を作るために、新しい技術を身につけること
- ⑤ 伝統的な蛙観にとらわれることなく、新しい発想・工夫の句を作ること

問9 文章中の空欄 A ㄱ E のいずれかに、次の一文が入る。入る箇所として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んでマークしなさい。

20

このようなわけで、蛙をその鳴き声によって賞^めでる美意識の歴史は、長く深く日本の文芸伝統の中に根づいた。

- ① A
- ② B
- ③ C
- ④ D
- ⑤ E